

日本海軍三年九カ月の最後の日までの戦い

総集篇の第三部―最終篇

この戦争の通算期間は三年と九カ月。この随想が天王山と想定したのは、開戦後およそ一年と九カ月ころの一九四三年八月後半となりますから、意外に早い時期に勝負は決まっていたこととなります。

事実、冷静に観察すれば、この時期から日米の戦力差は著しく拡大しており、特に海軍の場合は、初期には零戦、次には駆逐艦隊の健闘が目立つ程度に全体の戦力は低下していました。

このことがまず戦中も戦後も大きな判断の誤りを生み出します。

例えばコロ島戦の場合です。本来ならば、これは日本軍の惨敗に終わり、一万数千の兵が屍を南海の海と山野に埋める運命にありました。

それがあのように奇蹟的に救出された結果、軍の中枢部はその実態を完全に軽視し、戦後の研究者も同じように無視してしまいました。

この結果、その後のさらに大規模な戦闘における情勢分析の失敗が連続し、現地部隊が一段と深刻な苦難に直面する結果となります。

しかもその業績の再検証の過程で、戦後の研究者たちが、その背景にある「真実」を恣意的に解釈したため、多くの異説、謬説が残る結果となり、現在に至っても真実が覆われたままという状況です。（後述）

例えば、多くの玉砕者を出した孤島の場合です。これはもともと「絶対国防圏」という観念だけの空疎な虚像なのに、中枢の権力者がそれぞれの立場で指定したため、大部分が孤立して玉砕してしまいました。

マキン、タラワ、クエゼリン、ルオット、などなど。

これらの孤島はのちのペリリュー島や硫黄島などのように、意図して米軍の損害を極力多くし、進撃を遅らせるといふ、明確な目的のある玉砕とは違って、戦略上の価値はほとんど認められませんでした。

本来ならば、これ以降はコロ島戦を戦訓とすべきでした。基礎となる戦力が弱体化している以上、他には戦訓は存在しないからです。

驚くべきことに、約百隻の大発を動員して、船の喪失も約半数。しかし殆どは救出され、戦死者は約100名で戦死率2パーセント。輸送担当の救援部隊の戦死者数170名。戦死率15パーセント。

救出者一万二千人に対し、驚嘆すべき少人数でした。

さらに特筆されるのは、それまで火花を散らして激論を重ねてきた陸海軍が、窮地に追い込まれて以降、対立を克服し、不可能と思われた任

務を見事に成功させたという驚愕の事実でした。

ここで改めて撤収作戦成功の過程を振り返って見ます。

作戦の発動日は九月二十日。命令者は第八艦隊司令長官鮫島中将。

指揮官は三名。機動舟艇部隊は陸軍芳村少将。防備隊は陸軍南東支隊長佐々木陸軍少将。襲撃部隊は海軍第三水雷戦隊司令官伊集院大佐。

舟艇部隊には種子島少佐の大発40に、水雷艇9、魚雷艇1。チョイセル島に陸戦隊。陸軍は工兵隊2隊と大発若干。以上、陸海混成軍。

工夫が見られるのは防備隊で、陸軍佐々木少将の下に海軍大田少将の名があります。名目はともかく実体は従来通りの任務のままですから、戦闘と輸送の二刀流を駆使できるという絶好の立場を確保しました。

最終的な決断は鮫島中将が下したと思われませんが、中央の介在余地のない立場を巧みに利用した人事で、この作戦の隠れた殊勲者は鮫島中将だったかもしれません。しかし戦後も彼は沈黙のままでした。

コロ島ではもはやここまで思い切った意識革命に踏み切っています。

もしもこの革命をそのまま次の戦場に波及できたなら、この戦い全体の様相はかなり違ったものとなったでしょう。数多い隠された痛恨事の中でも特に重要なものの一つです。

(なお訂正を一つ。大田少将はこの時期にはすでに八連特の司令官でしたから、以前司令とした肩書は誤りでした。訂正です)

現実を無視したマリアナ沖海戦(一九四四年六月一五日)の虚構

マリアナ戦関連の戦後早々の一般概評では、小沢長官が事前に想定した千六百機の基地航空隊が、二割以下しか稼働せず、しかも広範な地域に分散していたため、各個撃破されて壊滅し、機動部隊の出動以前に無力化して機動部隊の単独攻撃となったことと、新機軸と期待されたアウトレンジ作戦が完全な失敗に終わったことによる敗北とされています。

さらに、米軍の潜水艦攻撃で正規空母の大鳳と翔鶴を失ったのが不運だったとも総括されています。

しかしコロ島撤収作戦の検証を終えて、改めてこのマリアナ沖海戦の再検証に戻ると、全く異なる評価が必要となってきました。

それは司令官や参謀たち全員の『危機感の欠如』です。

この危機感は、すでに前年の六月三十日、米軍重砲部隊のレンドバ島上陸以降、ソロモン方面で急速に高まり、コロ島撤収と陸海共同作戦の

原動力となった、あの根源の「力」です。

しかもその「力」を支えたのは、意外にも物理的には自重僅か9・5トンの大発と、精神的には将兵たちの「危機感」でした。

コロ島では、実行直前、指揮官たちはお互いと将兵全員の死を覚悟して、「よくて半減、悪くすれば全滅」と一致していたとされます。

事後的に考えれば、米艦載機にとつては、攻撃目標としての大発が小さ過ぎたのかもしれませんが、戦場では予想不可能の事態は無数に発生します。周到な準備を前提として、最後は気力と団結しかないのです。

コロ島では、陸海は最後に団結しました。米軍の魚雷艇に対抗するために、各大発に搭載する機関銃を相互に補充したりしました。

駆逐艦は陸軍の傷病兵を優先的に乗船させました。こうして駆逐艦による輸送は、最終的に全体の三分の一の四千人に及んでいます。このような小さな努力の積み重ねによつて、あの奇蹟は実現したのでした。

一方のマリアナ沖海戦では、終始一貫、他力本願が続いています。

戦力と期待していた基地航空隊の数字は、実は架空数字に近い不正確なものだったのが、戦後のかかりのちに判明しました。

戦後しばらく示された千六百機という数字は、もともとは計画だけらしく、太平洋戦争研究会の最近の数字では、開戦一カ月前には六五三機で、開戦後は米機動部隊の分散攻撃で消耗し、戦闘直前には百機以下にまで激減していたのが実態です。こうなるともはや弛緩を越えて、悪質な数字操作と判断するしかない状況だったのです。

アウトレンジも絵に描いた餅そのものでした。

この構想の骨子は、日本海軍の航空機の航続距離の長いのを活用し、敵（米）艦載機の届かない距離から発進して攻撃するということでしたが、これが真珠湾攻撃のような奇襲ならばまだ成功の可能性は皆無ではありません。しかしこの戦場ではすでに両軍とも展開済みなのです。

特に米軍の偵察網は優れていますから奇襲などは本来不可能でした。

こういう状況の中で、わが航空隊の第一次出撃は七時二五分。その後最終は十時三十分まで、九隻の空母が三隻づつの群を組んで出撃し、一組だけは一回、あとの二組は二回づつの出撃でした。

九隻の空母から発進した艦載機の出撃累計数は三〇五機。損失一九六機。これを迎え撃った米軍の損失は僅かに二十五機。

しかもこの間に正規空母の大鳳と翔鶴を潜水艦で失い、米軍の二次攻

撃で空母飛鷹を失い、しかも敵空母はほとんど無傷という、絵に書いたような惨敗ぶりでした。

敗因は明らかです。ミッドウェー戦では九分九厘まで大苦戦したスプルーアンス提督が、ソロモン戦を通じて強大な新鋭機動部隊に充分な訓練期間を与えられ、日本海軍の長所も欠点も知り尽くしていました。少しも慌てる必要はないと読み切っていたのです。

彼は麾下の全戦闘機を予想される戦線の正面に展開し、ただひたすら日本軍の襲来を待つだけでした。

待機した戦闘機はおよそ四百機。しかも襲来する日本機は何回かの交代ですから（実際は全艦隊が二回に分け、かつ各空母ごとの各個攻撃）対抗できるどころではありません。まさに米軍が豪語したという「マリアナの七面鳥狩り」状態となりました。もともと数字上も桁違いの大差という無理な作戦です。戦後に一部の人たちがいう、操縦員の訓練不足というのは想像だけで、根本は単なる航空機不足と作戦ミスです。

この惨敗以降、米軍は予定通りマリアナ諸島の制圧に着手しました。これに対する日本軍側上層部の対応は、どの記録を見ても支離滅裂としかかない混乱ぶりです。あの「完膚なき惨敗」がどれほどの衝撃だったかを如実に示しています。

中にはまだ健在な戦艦部隊をサイパンに逆上陸させて反攻の足掛かりとする案など、精神状態を疑わせる案などがありました。

一方の米海軍は、勝機と見て容赦しませんでした。

マリアナ沖海戦から四カ月間、ハルゼー機動部隊の攻撃は続きます。

日本軍が次の米軍の進路をあれこれ議論しているうちに、米軍は陸軍のマ將軍が強引に作戦をリードして、比島攻撃を開始させました。これがいわゆるレイテ沖海戦のそもそもの発端です。従って本来は比島沖海戦と呼ぶのが正しく、ここでもこれからはその名とします。

マ將軍の目的は、自分を追い出した日本軍の進路を逆に辿り、比島全土を回復することです。海軍としては、できれば単純な台湾方面への進出を希望したらしいのですが、敢えて反対しなかつたようです。

この作戦変更の最大の受難者が、実は海軍のハルゼー提督になつてしまつたのです。そうです。比島沖海戦で日本海軍は、その名誉を挽回する最後の機会を得たのです。

比島沖海戦の真実

この海戦については、対立する三説があります。レイテ湾に突入し、残る輸送船（約三十隻）を撃沈すべきだったという相討ち説と、戦場を早期に離脱して脱出したのが正解というのにも諸説があります。

後者には二説があり、一つは佐藤和正説で、栗田艦隊が敵中深く侵入し、護衛空母艦隊に打撃を与えて一隻の空母と駆逐艦三隻を撃沈した後に、当初のレイテ輸送船団への突入を断念した理由を、根本は時間不足とし、さらにその背景を「神風」としたもので、異色であり、根幹に触れる説です。

一般に多い説は、彼が追跡していたのが護衛空母艦隊だったことを原因とする説で、この艦隊が正規空母艦隊と誤認した結果、長時間の追跡となり、味方の犠牲も大きく、余力を失っていたとするものです。

ただしこの説には護衛空母に関する誤認があります。この空母の艦型を名簿で確認すればすぐに分かるのですが、これは元来は戦闘用に使われて訓練された空母であり、護衛の駆逐艦隊も同様です。味方艦隊が苦戦したのを批判する傾向があるのは正当ではありません。

佐藤和正説の骨子は、実は「神風」と密接に関連しています。栗田艦隊が追跡中のあの位置が、「神風特別攻撃隊」の敷島隊、山桜隊、朝日隊が特攻攻撃を執行した地域と時間にほぼ一致していたのです。

図らずも栗田艦隊は、「神風」と連動しての戦いとなり、北方に誘導された正規空母艦隊十六隻以外の護衛空母艦隊三群十六隻対栗田艦隊という構図となっていたのです。

結果的にこの三群は、撃沈2、撃破5という、これまでは無敵を誇った彼らが、予想もしなかった痛手を受けて大騒動です。これがが当時の比島海域の現実であり、レイテ湾の荷物どころではなかったのです。

（佐藤の著書でも、戦中の栗田中将宛の謎の電報で、北方に米空母ありというのに関連して、中将が、戦後に七十八期の大岡次郎に、「あれは三川からだ」と明言した挿話を転載していますが、これはまさに、当時の米艦隊の恐慌ぶりを伝える間接的証言として歴史的証言です）

もう一人の説の野村実は、突入した場合の栗田艦隊の惨状を中心にしていますが、これも説得力があります。第七艦隊の護衛空母も、戦艦群も、そりなりの戦力があり、しかもハルゼーの本隊はすでに実情を把握して、必死の追跡に展開中です。

北方転進もレイテ湾突入も、すべて悲惨な全軍二万の集団自殺です。

筆者はさらに決定的な栗田艦隊脱出正解説を採ります。

第一は、小沢艦隊の囮作戦は、明らかなハルゼーの判断の失敗もあり見事に成功し、マリアナ戦の惨敗の不名誉を一挙に挽回しました。ここで栗田艦隊を米艦隊の餌食にし、レイテ湾の海底深く沈めてしまつたのに加えて、「神風」隊の偉業まで無にする意味がありません。

第二は、米軍にとつての三十隻という船舶数は、二万というわが軍の命と引換えるには余りにも少な過ぎるという事実です。

既述のように、米には開戦時にプラス戦時中の新造船で、計二万隻の船舶があります。日本軍とは船舶の相対価値が違い過ぎています。

さらにこの時間帯は、米艦隊の正規空母、軽空母、護衛空母のほぼ全艦が栗田艦隊を一斉に追跡し始める一方、「カミカゼ」の連続攻撃があり、連合軍全体が復讐と慎重の狭間で揺れていました。

しかし栗田艦隊は躊躇なく敵中突破の最短帰路を選びました。

これが正解でした。「カミカゼ」を警戒したハルゼー軍の追撃は慎重で、わが軍は巧妙に抵抗して往路の約半数が生還し、絶対的な戦力差を克服、長大な最後の大航海を切り抜けるのに成功しました。

直線距離で二千海里。迂回を含め、かつキロで換算すれば全航路およそ四千キロ。ほとんどすべてが強大な米軍機動部隊の重囲の中の決死行でした。

最後に一つ、小沢艦隊の支援駆逐艦の中に、雑木林艦隊の四隻の名がありました。桑、楨、桐、杉です。特に桑は、この年の七月に竣工したばかりですが、囷空母瑞鳳の援護を担当。瑞鳳の沈没に際して、乗員847名を救助。見事にその任を果たしました。桑はその後もレイテ湾周辺で奮戦しますが、その年の十二月二日、米軍駆逐艦と差し違えの形で沈没。艦長山下正倫中佐以下250名戦死。喝采と哀悼を捧げます。

——以上、総集篇の最終篇を終わります。改めて御精読に感謝。